

割の生徒が出席した。これはホームルーム活動の活発化に取り組んだ自治会の、この1年間の研究成果でもあった。そして3月31日に大橋校長が願いにより本校校長を免ぜられた。

2 南館完成のころ（1966～68年）

このところ、芦高生は大きく変化しつつあった。とくに1965（昭和40）年度から、校区外通学が厳しく制限されるようになり、逆に芦屋の中学から神戸第1学区への進学が認められるなどした。かつて阪神間の各中学から広範な生徒を集めていた芦高は、学力指導の面でも大きな試練に立たされた。ちなみに1965（昭和40）年度入学生は、1年次に10名、2年次に10名の原級留置の生徒を出すにいたった。1963（昭和38）年度の教育課程の改訂とともに、本校では、3教科11単位以上の不認定科目があると原級留置することが決められたが、これまで学力不足による原級留置者はほとんど出ていなかった。

また自治会活動は低調化打破の試みの後に、しだいに挫折感が深まっていた。第19代執行委員会は「芦高生よ顔を洗え」「笛吹かず、踊らず」と述べ、第20代執行委員会は「正直のところ、今の芦高には自治会というものは、見あたらない。あるのは、奉仕会（先生手助け会）だけだ」と述べている。また記念祭の終幕祭について、執行部は「襲撃はなかった」とか「一部の三年生が、終幕祭の時に私たちを襲うなどといった、けしからぬ流言が飛び、私たちは冗談とも本気ともつかず、逃げ出す方法を考えたりしたぐらいであった」「襲撃は起こらず、まずまず平穀に記念祭は終った」と「芦笛」に書かざるをえない状態であった。クラブ活動も、ひとつの活動に陰りが見られた。このころの「芦笛」には、

“シニカル”や“傲慢”“怯懦”などの言葉が目につく。芦高生は内省化しつつあった。そしてベトナム戦争をはじめとして、政治や社会への関心がしだいに頭をもたげつつあった。

ベトナム戦争は、1964（昭和39）年8月2日のトンキン湾事件を口実に、翌1965（昭和40）年2月7日に米軍機が北爆を開始したことによりはじまっ

た。アメリカはベトナムの戦場へ多数の兵士を派遣したが、北ベトナムやゲリラ側の抵抗も激しく、戦争は泥沼化していった。米軍介入に反対する国際世論はしだいに大きくなり、アメリカ各地ではベトナム反戦運動が起こり、日本でも反戦運動が広まりを見せた。さらに1968（昭和43）年1月の原子力空母エンタープライズの佐世保入港は、大規模な反対運動を引き起こした。また中国では、1966（昭和41）年に文化大革命が本格化し、北京に紅衛兵が出現した。このように激動する世界情勢は、当時の日本の若者に深刻な影響を与え、また芦高も例外ではなかった。

1966（昭和41）年4月1日に、兵庫県教育委員会教職員課長後藤貞夫氏が本校第7代校長に補せられた。後藤校長は「目先の当落だけにこだわらず、将来、真に、日本の運命と人類の福祉を背負って立ち得る者はだれかということを目標にして、日々の活動をつづけるべきである。すなわち、自治会活動を大いにやろう。クラブ活動にも精を出そう。そして眞の学問を身につけよう」との抱負を語った（「芦高新聞」第117号）。なお、これまで芦屋高校長が武庫高校長を兼任していたが、この年から武庫高校に専任の校長が置かれることになった。4月8日に第1学期始業式ならびに入学式が行なわれた。この年の1年生は10クラス、496人でようやく生徒急増期が一段落した。また従来の指導委員は説明員と名を改めて1年生の指導にあたることになった。ただ、その活動状態は今一つ徹底していないという指摘もあった。しかし、このところ自治会執行部は、ホームルーム活動の充実に力を入れており、前年度後半からはロングホームルームの年間計画の作製に着手し、新年度からは計画書提出を決めるなど意欲的に取り組んでいた。

4月12日は創立記念日で休業日となり、また26日は公労協ストのため、本校をはじめ、県下の公立校の多くが休校となった。さらに30日には、私鉄ストのため、1時間目の授業がカットされた。なお4月1日から土地・建物にもメートル法が実施され、鯨尺は生産禁止となった。衣食を中心としたメートル法は、すでに1959（昭和34）年1月から実施されて

いた。5月4日に春季遠足が行なわれ、1年生は甲山、2年生は布引・修法ヶ原、3年生は摩耶山に出かけた。11日には第7回対県西定期戦が実施され、芦高が辛くも10-8で勝利を得た。この年は西宮市民体育館が新設されたこともあり、水泳とラクビーを除く各競技が西宮市民グランドで開くことができ、生徒の行動や応援のまつりが非常によかったです。もっとも、相変わらず芦高生の遅刻が多く、また競技終了後にグランドで行なわれたサークルダンスへの、芦高女子生徒の参加も悪かった。また競技中にトランプや将棋をしている芦高生もいたという。

6月11日からはじまった第10回県高校総合体育大会では、男子バスケット部が優勝し、体操部もタンブリングの部で優勝し、8月の全国高校総合体育大会出場が決定した。なお県高校総体では本校体育館は卓球会場となった。芦高は毎年のようにいざれかのクラブが国民体育大会に出場していたが、残念なことにこの年には、本校からの国民体育大会への出場クラブはなかった。ただ1年生の藤本歌子君が、第16回全国高校スケート選手権大会のフィギュアスケートに出席して8位に入賞し、ついで冬季国体に出席した。そして6月20・21日には文化部校内展が開かれた。

合唱部は第18回N H K全国合唱コンクール県大会で1位となり、4年連続で近畿大会に出場して優秀校に選ばれた。また、これまでの全関西吹奏楽コンクールから県単位となって開かれた兵庫県吹奏楽コンクールにおいて、吹奏楽部がベスト8にあたる優秀賞を得た。このところ吹奏楽部も県下で上位の成績をおさめるようになっていた。合唱部・吹奏楽部の前身である音楽部は、1946(昭和21)年の校友会発足とともに創設され、1949(昭和24)年に声楽部と器楽部および理論部に分かれて活動するようになり、1958(昭和33)年1月に正式に分離した。そして声楽部は1958(昭和33)年度からコーラス部(合唱部)を名乗るようになった。また1953(昭和28)年に器楽部内に吹奏楽団が創設され、弦楽部員の減少とともに管弦楽から吹奏楽に重心が移り、1964(昭和39)年度から吹奏楽部と改称していた。

立候補者がそろわなかっただため、締切りを延ばし

た自治会役員選挙は、6月15日に行なわれて7月に第19代執行委員会が成立した。選挙管理委員会の努力にかかわらず、依然として自治会役員選挙は事実上の信任投票に終った。7月13日に1年生492名、職員22名が10台のバスに分乗して、2泊3日の野外活動に出発した。過去2回の野外活動が希望者のみの参加で行なわれたのに対し、この年から同じ県北ハチ高原で、全員参加による野外活動となつたのである。民宿利用で費用は2291円であった。野外活動は、生徒たちが日常生活から離れ、大自然の中での集団生活を通して相互の友情を深め、人間性の高揚をはかり、とくに自治・自由の精神を養うことを目的とした。その後、蓼科・白馬・大山と行先は年とともに変更されたが、野外活動は1年生の最も重要な行事となつた。野外活動が終ると、18日には恒例の水泳訓練が行なわれた。

さる2月18日に着工された南館西側半分7教室が9月7日に竣工し、15日に引き渡された。新築された南館は防音二重窓で、換気装置はついているが冷房装置はなかった。また窓枠には今までの鉄製のものと異なり、アルミサッシが用いられていた。記念祭終了後の10月3日から使用開始となった南館は、3年生が入ることになり、スリッパ使用で土足厳禁とされた。

9月27日の前夜祭をスタートに、第18回記念祭がはじまり、体育祭・合唱コンクール・クラス演技・講演会・鑑賞会(招待音楽会)・文化祭などの各行事が、10月2日の終幕祭まで例年通り行なわれた。この年は、1学期に行なされていた校内弁論大会が記念祭行事に加わり、前年度のクラス重視に対して、クラブの展示や公演などに重点が置かれた。なお南館がまだ使用できないため、展示はパイプ教室で行なわれた。前夜祭ではまたしてもうどんやトマト・コショウが舞台に飛んだ。また体育祭のデコレーション・ヤグラ・仮装行列・ユニフォームをめぐって、種々の議論がかわされた。とくにユニフォームは、はじめ代議員会で禁止と決ましたが、すぐに撤回され、作ってもよいことになった。しかし、学校側が応援席での着用は許可したが、競技での着用を禁止したため一部では不満が残った。3年生の女子

の中には、ユニフォーム姿でグランドに出たため、教師から退去させられる者も出るという一幕もあった。記念祭の雰囲気を盛り上げ、クラスの団結をはかるための方法が課題として残った。合唱コンクールの課題曲は「コロラドの月」で、この年も盛会であった。招待音楽会にはチェロの平井丈一郎氏、講演会は関西学院大学教授本位田茂美氏が招かれた。また招待試合では、この年に全国大会に出場したバスケット部が、六甲高校を招いて試合を行なった。

10月18日から23日まで、2年生が中・南九州方面へ5泊6日の修学旅行に出かけた。前年より時期が早まったものの、この年の修学旅行も、行きは国鉄、帰りは別府から船を利用するなどほぼ前年と同じ内容であった。当時は、修学旅行がただの観光地めぐりと強行日程に終始しているとの批判が投げかけられつつある時期でもあった。3年生が旅行に出かけている間の20日に、1・3年生の秋季遠足が実施され、京都・奈良・天ヶ瀬方面に出かけた。10月21日には、総評がヴェトナム反戦統一ストを呼びかけ、また日教組があわせて人勧完全実施を要求してストライキを行なった。本校の職員もこれに参加したため、授業は午前中のみ実施され、午後からは授業カットとなった。23日に旧南館東半分の取り壊し工事がはじまり、12月1日に南館第2期工事の地鎮祭が行なわれた。そして20日には南部忠平氏の講演会が開かれた。また冬休みに入った25日から、高体連主催のスキー教室が新潟県赤倉スキー場で開かれ、本校から1・2年生の希望者が参加した。

自治会執行部は、この年も低調化打破のためのさまざまな試みを行なった。11月20日には執行部と山岳部の主催による登山会を行なったが、参加者は26名に終った。12月3日の生徒大会では、クラブ対策や記念祭・自由と規律の3項目の提案がなされて可決されたものの、生徒大会参加率は45パーセント程度で、とくに3年生は9.3パーセントの生徒が参加したに過ぎなかった。このころ執行部は、記念祭を春は文化祭と定期戦によるクラブを軸とする自治と創造の祭典、秋はクラスを軸とする祭典の二部制にすることも考えたが、これは1967（昭和42）年度1学期のアンケートの結果、実現しなかった。さらに

文化部レポートの作成や歌声サークルなどの企画はいずれも挫折した形となった。

1967（昭和42）年1月5日に、1年生男子は花園ラグビー場における全国高校ラグビー大会を見学した。これは今日にいたる本校の伝統行事となつた。21・22日には鉢伏山でスキー教室が開かれた。2月15日に予定されていた校内マラソン大会にかわる耐寒遠足は、天候不順のため中止となった。この年と翌年は、従来のマラソンコースが芦屋浜の防潮堤工事で使えず、六甲山登山が予定されていたのである。その15日には数学の細見照男教諭が逝去された。本校職員・育友会員・卒業生・生徒代表等がバス2台に分乗して、氷上郡春日町黒井で當まれた17日の葬儀に参列した。御遺族から教諭を偲ぶよすがにと山本茂斗萌画伯の絵が贈られ、本校図書館の閲覧室に掛けられた。また本校では、細見教諭の遺児に対する奨学金寄附募集も行なわれた。2月25日に芦高第19回卒業証書授与式が行なわれ、第22期生男子386名、女子220名、計606名が卒業した。優等賞が2名、皆勤賞が52名、自治会賞が53名、記念章が318名に与えられた。

1967（昭和42）年4月7日に第1学期始業式、翌8日に入学式が行なわれた。この年の1年生は受験者が定員ぎりぎりで、入学試験において相当の学力差が見られ、このままではいっそうの原級留置者が出てきそうな気配であった。そこで英・数の2教科について学力別授業を行なうことになった。学力別授業は1964（昭和39）年2月の「答辞事件」の後、しばらくして取り止めとなっていたものである。復活した学力別授業は、1969（昭和44）年度まで続けられたが、折から起きた高校紛争の中で論議的となり、1969（昭和44）年度の3学期に中止されるにいたった。

4月12日は創立記念日で休業日となり、15日土曜日の午後から新入生歓迎の文化部発表会が開かれ、演劇・コーラス・プラスバンド・箏曲部が熱演し、「校歌」「自治会歌」の歌唱指導も行なわれた。5月2日には、1年生は甲山・仁川、2年生は六甲、3年生は摩耶山方面への春季遠足が実施された。さらに8・9日の両日にわたって文化部校内展が開か

れ、写真・美術・書道・被服・華道の各部が日ごろの成果を披露した。15日に西宮市民グランドおよび体育館で行なわれた第8回対県西定期戦は、6-11



第8回対県西定期戦

の成績で惨敗を喫した。またこの1学期には、自治会主催の登山会が新入生の歓迎を兼ねて行なわれ、第19回校内弁論大会も開かれたが、いずれも低調であった。

このところ、芦高はクラブ活動の面でも以前のような活躍が少なくなっていた。5月28日に硬式野球部が、ようやく春季県大会に8年ぶり3度目の優勝を飾った。近畿大会では1回戦で敗れたものの、この年の夏こそはと期待が集まつた。夏の大会の3回戦で、芦高は津名高校と延長16回の死闘を演じ、引き分け再試合に勝ったものの、この疲労がたたって4回戦で敗れ、甲子園出場の夢が断たれた。6月10日から第11回県高校総合体育大会がはじまり、1年生は入場式を見学した。この日、2年生は校内球技大会、3年生は進学講演会が行なわれた。県高校総体では、バレー・ボール男子が近畿大会出場権を得た。さらに8月の全国高校総体には硬式テニスから2人、10月の国体にはラグビーから2人が出場した。また芦高にスケート部はなかったものの、前年に統いて2年生の藤本歌子君と新たに1年生の守屋資子君が、第17回全国高校スケート選手権大会に出場し、フィギュア部門で藤本君が個人2位、守屋君が16位となり、芦高は団体総合2位の成績をおさめた。2人はさらに冬季国体にも出場した。

文化部ではこの年もコーラス部の活躍が目立つた。コーラス部は、7月28日の第19回N H K全国合唱コンクール県大会で前年に統いて1位となり、近

畿大会に出場した。芦高はこの年も残念ながら2位に終り、全国大会出場の夢を逸した。またブラスバンド部は兵庫県吹奏楽コンクールにおけるA編成の部で優秀校に選ばれ、美術部は兵庫県小中高校絵画展で1人が特選に選ばれた。

6月15日に自治会役員選挙が行なわれ、定数ぎりぎりの立候補者のため、この年も信任投票の形がとられ、7月に第20代執行委員会が発足した。そして7月9日の西日本集中豪雨により、中館地下が浸水して当分の間食堂が使用不可能な状態に陥つた。多分、この時の豪雨のためと思われるが、8月1日に生物研究部員が中館と南館の間の噴水池で、直径18ミリ程の淡水クラゲを発見した。はじめ固体数は100にも満たなかつたが、月末には約500に増えたといふ。7月13日には英語教育研究会が開かれ、早稲田大学教授西尾孝氏による「大学進学のための英語教育」と題する講演があり、2・3年生が聴講した。

この年は進学を主眼とした講演会を中心に、さまざまな講演会や座談会が企画された年でもあった。同じ7月の15日に1・2年生を対象に長浜俊三氏を講師とする講演会が開かれ、19日にインド総領事ラオ氏を囲む座談会が催されてヨガ修行の実演もあつた。2学期になると、9月28日に記念祭行事として高山忠雄氏による「海外における日本人」の講演、10月11日に関西学院大学教授田中俊一氏の「文芸と国語」と題する3年生の進学講演会が開かれた。さらに11月8日の育友会教育懇談会では、神戸外大教授竹田加寿雄氏の「今日の学校教育に家庭はどうのように協力したらよいか」と題する講演があった。また12月19日には狂言鑑賞会が開かれ、「末ひろがり」「附子」が演ぜられた後、2年生を対象に花園大学長山田無文師の「人命と人生」と題する講演があった。師の「人命は与えられるものであるが、人生は自分で作っていくものである。生命を持って生まれてくるものは多いが、人間として生まれてくるものは、ほんとうに少ない」という話は、生徒たちに大きな感銘を与えた。そして3学期の3月14日には、神戸大学教授井関清志氏による2年生進学講演会が開かれた。

1年生の野外活動は、2回の試行期間をへて前年

度から全員参加の学校行事となった。しかし、ハチ高原は種々の難点があり、より本格的な野外活動とするため、この年から信州蓼科高原で実施されるこ



蓼科への1年生の野外活動

とになった。交通事情がよくなつたとはいへ遠隔地であるので、野外活動の日程も1日多くなつて3泊4日になつた。もっとも3泊目はバスでの車中泊であり、実質的に3泊4日となるのは、1970（昭和45）年度からである。また宿舎となるスポーツホテルの収容力の関係から、蓼科での野外活動は、5クラスずつ、8月11～14日および13～16日の2度に分かれて実施されることになった。費用は4449円であった。名神をひた走る冷房完備のバスに大喜びした生徒は、信州の雄大な自然にふれ、班別活動でおもいおもいに歩きまわり、日常生活から解放された楽しい時を過ごした。



第19回記念祭

第19回記念祭は「考える記念祭」と呼ばれた。記念祭を春・秋の二部制とする前年度執行委員会の計画を、第20代執行委員会も受け継ぎ、記念祭の意義や目的を再構築しようと考えていた。しかし、前述したように二部制は、自治会員の否定的な空気の中

で再考慮を余儀なくされた。こうして第19回記念祭は、9月27日に例年通りにはじまつた。この年は開幕式・前夜祭が記念祭初日にあり、実質的に1日の短縮となつた。27日の鑑賞会では道化座が「おんによる盛衰記」を演じ、28日には講演会・合唱コンクール、29日には体育祭、30～1日に文化祭が行なわれた。

10月26日に2年生が神戸港より船で別府に向けて出発した。この年の中・西九州方面への修学旅行は、前年度に1年生の野外活動が全員参加によって実施されたのを受け、新機軸が打ち出された。かねてより批判の強かった観光地めぐりの駆け足旅行を止め、自然に親しむことを目標の第一に掲げ、重点的に時間をかけ、ホームルーム活動を重視するということが、主な特色であった。ただ残念なことに、主目標であった九重登山は台風の襲来により、変更せざるをえなかつた。

11月7日に秋季遠足が行なわれ、1年生は京都・奈良方面、2年生は京都・室生寺方面に出かけた。11月25日には南館落成式が行なわれた。南館は1966（昭和41）年2月18日に着工され、9月7日に西半分の第1期工事が竣工し、そして1967（昭和42）年10月31日に東半分の第2期工事が竣工したのであつた。これによつて3年生の大半のクラスは南館に移つた。しかし、せっかくの南館も夏は窓を開けることができないために暑く、冬は南側が廊下のため寒いなど新たな問題を生んだ。そこで県に陳情して3学期にようやくストーブが入つた。さらに学校側で夏冬の室内温度を調べ、たびたび県に陳情した結果、1968（昭和43）年度の予算で冷暖房工事の予算が認められ、7月12日から工事がはじまつた。しかし、冷暖房設備が完成したのは11月で、その年の夏には間に合わなかつたため、各教室4台ずつ、計36台の扇風機が設置された。このころには中館も騒音が激しく、理科実験室はやむなく使用されたが、他は比較的静かな2教室を除き、英数国・準備室や文化部の部室・倉庫に使われている状態であった。

12月23日に終業式が行なわれた後、25日から高体連主催のスキー教室が前年に続いて開かれ、本校から41名が参加した。1968（昭和43）年1月5日およ

び7日に、やはり前年と同様に1年生男子が花園ラグビー場で全国高校ラグビー大会を見学した。また27・28日には鉢伏山で、恒例のスキー教室が開かれた。天候不順のため前年に中止となった1・2年生の耐寒遠足は、2月3日に行なわれた。男子は芦屋仲池からお多福山をへて保久良神社、女子は本山駅からお多福山をへて阪急芦屋川まで寒さの中を元気に歩いた。

2月27日に芦高第20回卒業証書授与式が行なわれ、第23期生男子315名、女子199名、計514名が卒業した。優等賞が2名、皆勤賞が37名、自治会賞が45名、自治会記念賞が273名に与えられた。なお、学年末の3月13日には、1年生が映画「地球は燃えている」を講堂で鑑賞した。

3 模索する芦高自治会（1968～71年）

若者の三無主義ということがいわれるようになって久しいが、芦高生も例外ではなかった。自治会活動に対する無関心は年を追ってひどくなり、クラブ活動も停滞ぎみであった。自治会執行部は低調化を打破しようと努力したが、芦高生の自治意識の衰退を前にして挫折感を深めながら模索していた。

1968（昭和43）年1月に、東京大学医学部の研修医問題に端を発した紛争は無期限ストに発展し、安田講堂占拠、機動隊導入による占拠学生の排除、再占拠をへて全学部にも広まった。この事件は他大学の学生運動にも大きな影響を与え、日本大学をはじめとして1968（昭和43）年度には67大学、1969（昭和44）年度には127大学で紛争が発生した。各地の大学では全学共闘会議（全共闘）が出現し、授業放棄や大衆団交・封鎖が日常化した。大学紛争の背景には、1966（昭和41）年度以降の大学入学志願者の急増とともにともなう大学教育の大衆化があった。これに対して大学の教育・研究体制や管理・運営体制は旧態依然としたままで、大学や社会の変貌に対応できていなかった。1969（昭和44）年1月に安田講堂の封鎖は機動隊によって解除されたものの、東大入試は中止に追い込まれた。同年8月7日には、賛否両論があった「大学の運営に関する臨時措置法」

が公布されるにいたった。しかし、学生運動が過激化して一般学生から遊離するとともに、世論の強い批判を浴びるようになり、やがて大学紛争も同年11月以降、鎮静化の方向をたどりはじめた。

この間、「教育のあり方」を問いただそうとする大学紛争の影響を受け、高校にも紛争が波及した。とくに1969（昭和44）年春の卒業式は、卒業証書を破り捨てるなど、各地の高校で混乱が生じた。兵庫県下では1968（昭和43）年夏ごろより、「10.21国際反戦デー」やベトナム反戦・エンタープライズ寄港反対などの集会や街頭デモに、阪神・神戸・明石・加古川・高砂・姫路などから多くの高校生が参加した。また相当数の高校で、頭髪・服装の自由化や校則改正を要求する声が上がった。そして1969（昭和44）年の終りごろから、授業のあり方や受験教育・同和教育さらに育友会費の使途をめぐり、授業放棄や生徒集会の開催・教室封鎖などが発生し、文化祭や卒業式が混乱した学校もあった。1970（昭和45）年度には、数日以上にわたって授業を停止せざるをえなかった高校が、県内で十数校におよんだ。

また、このころは高校への進学率の急激な上昇と特定校への志願者の集中が、過度の受験準備教育を引き起こしているとの批判が強まっていた。そこで文部省は1966（昭和41）年7月18日に、「公立高等学校の入学者選抜について」の通達を出し、中学校からの調査書を尊重することや、学力検査の実施教科について適切に定めることを、各都道府県教育委員会に求めた。そこで兵庫県教育委員会は、公立高等学校の入学試験において学力テストを全廃し、中学校からの調査書および思考力テスト・体育実技を併用することにし、1967（昭和42）年10月3日に新しい選抜方法を発表した。これがいわゆる「兵庫方式」である。そして1968（昭和43）年度の1年生は、この方式による最初の入学生であった。

なお前年の10月に理科教育および産業教育審議会は、「高等学校における理科・数学に関する学科の設置について」を答申し、理数科の設置が認められることになった。そこで芦高も、この1968（昭和43）年度に理数科設置について研究協議を重ねたが、理